

2026年2月8日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教70「闇に耐える光」

創世記1：1～3、ヨハネ12：44～50

「イエスは叫んで、こう言われた」（44節）とあります。イエスさまが叫んでおられる。それはこのところを強調しているということです。これだけは覚えておいてほしい。あるいはこのことを心に留めながら、これからのところを読んでほしいということです。それは何でしょうか。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである」（44～45節）ここでは父なる神さまとイエスさまは一つであることが言われます。ですからイエスさまを見る者は、父なる神さまを見るのです。イエスさまを通して、わたしたちは父なる神さまを正しく認識し、イエスさまにこそ神さまの救いの御業を見ることができるのです。

この後、イエスさまはどのような救いの御業を行われるのでしょうか。次週読みます第13章では、イエスさまが弟子たちの足を洗われるという洗足の物語を読みます。これはヨハネが伝えるいわゆる最後の晩餐での一コマです。イエスさまがまるで僕のようにして身を低くして弟子たちの足を洗われる。足はほこりで汚れるところです。その汚れたところを水で洗い流し、手ぬぐいで拭かれる。それは僕の仕事と言われます。ですから弟子たちは驚き躊躇します。ペトロは「洗わないでください」と言います。このことがすでにつまずきとなっています。イエスさまの中に神さまの御業を見ることができないのです。

そのように身を屈め、弟子たちの足を洗われる延長線上にイエスさまの十字架があります。実際に捕らえられるところは第18章からですが、もう数時間後には捕らえられ、そして十字架にかけられるという状況なのです。そのときにイエスさまは大声で父なる神さまとわたしは一つであると叫ばれるのです。それは僕のように身をかがめ足を洗われるイエスさまの中に、そしてやがて十字架におかかりになられるイエスさまのお姿の中にも父なる神さまご自身の御業を見なさいということです。

教会の暦では、来週の水曜日からレント受難節が始まります。十字架に向かわれるイエスさまを覚えて過ごす日々です。教会はイエスさまの十字架に救いを見えています。グリュネヴァルトという画家の描いたイーゼンハイムの祭壇画、イエスさまの十字架の絵を改めて思い出します。その絵のイエスさまは皮膚の色も変色し、十字架の上で身をよじらせ、痛々しく苦悶に満ちた表情をしています。側にいる女性は卒倒しそうになって弟子に支えられている。見るに耐えない、これほど悲惨な十字架の絵はないと言われます。わたしは図録でしか見たことがないのですが、実際に見たらどれほどインパクトのある絵だろうと思います。

十字架のイエスさまの側に立っている人が何人が描かれています。その一人は洗礼者ヨハネです。そのヨハネが十字架のイエスさまを指差して何か言っています。それはヨハネ福音書の第3章にあります「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」（3：30）という言葉です。イエスさまの十字架の時に洗礼者ヨハネはすでに殺されています。けれども洗礼者ヨハネはこの十字架のイエスさまをこそ伝えたかったのだとグリュネヴァルトはその絵の中に洗礼者ヨハネを登場させている。そしてこの十字架で苦しんでいるイエスさまを指差して、この方こそ栄えるべきお方だと宣言しているのです。ここには深い信仰があります。この十字架のイエスさ

まを見なさいと洗礼者ヨハネは訴えている。実際に洗礼者ヨハネは生きている時に言いました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(1:29)と。その絵の中にも小羊が登場しています。小羊の胸からは血が流れ、その血が杯に注がれる。このイエスさまが犠牲の小羊となられ、わたしたちの罪を贖ってくださる。それがわたしたちの救いだ。十字架という絶望の極みに救いの光を見ているのです。

苦しみや試練の中でわたしたちは何を見ているのでしょうか。ただこの世の事柄だけを見て一喜一憂するのでしょうか。大切なことは、そこにイエスさまを見ることができか、神さまの御業を見ることができかということです。しかしなかなか見ることができない。そこにわたしたちの不信仰があります。その不信仰に対する裁きもここで言われます。「わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く」(48節)と。その裁きの前にわたしたちは誰一人逃れられませんし、耐えることはできません。それほどにわたしたちは不信仰なのです。けれどもイエスさまは言われます。「わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである」(47節)その救いこそ、イエスさまの十字架とよみがえりです。イエスさまが、神さまに背き不信仰極まりないわたしたちの罪を贖い、その裁きを代わりに負ってくださった。十字架でその終わりの日の裁きに耐えてくださった。わたしたちはその救いをイエスさまの十字架に見るのです。その信仰がたとえ絶望の中でもわたしたちをその根底で支えるのです。

「わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に来た」(46節)わたしたちは試練の中に置かれますと、闇の力に簡単に縛られてしまいます。暗闇にとどまり、そしていつのまにかそれが当たり前ようになってしまう。すでにわたしたちはその闇が当たり前になっています。今の状態、罪の状態が普通になるのです。けれども人は無意識のうちにも光を求めています。天地創造の時に神さまが「光あれ」(創世記1:3)と言われた、その根源的な光です。イエスさまは、その光として到来しました。それは暗闇の中にわたしたちがとどまることがないためです。暗闇の中にも光を見るためです。先ほどのグリュネヴァルトの絵は、病院の礼拝に飾られた絵です。重い病に苦しむ人々にとってこの絵が光になりました。病の中にもイエスさまを見ることができた。神さまが決して自分たちを捨て置かれず、この痛みや苦しみを知ってくださり、共に担われていることを知ることができた。それは彼らにとって希望でした。わたしたちがそのような信仰に招かれ、生かされていることは幸いです。これからますます世の闇は深くなっていくでしょう。けれどもこのイエスさまの光があれば、わたしたちはどのような闇にも耐えることができます。

天の父よ。わたしたちを包む闇の深さを感じます。希望が見出せないでおります。どうかイエスさまの十字架のお姿を見つめさせてください。そこにこそこの闇に耐える光があることを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。